

化学教育 徒然草

科学を文化として捉える価値観 —ストラスブールの時間—

HORI Akiko

堀 顕子

芝浦工業大学 准教授
平成 28 年度化学と教育誌特集担当幹事



巻頭言

2016年のノーベル化学賞は、フランスのソバージュ先生、アメリカのストッダート先生、オランダのフェリンハ先生が受賞された。人の手によって合成された分子が、制御された機械運動に基づいて外部エネルギーを仕事へと変える研究は、現在においても化学と分子工学における先駆的なテーマといえる。

私は博士課程において、現東京大学藤田誠先生のもと、分子機械の発展の根底を支えたカテナンの合成研究に携わった。2001年には、わずか半年ではあったが、ストラスブール大学のソバージュ先生の研究室に留学する幸運にも恵まれた。このような研究が「何の役に立つのか」と問われることは当時からよくあったが、多感な20代の時期に「目先の役に立つ明確な目的」に縛られずに自由に発想すること、同じ志をもつ仲間が世界中にいることを知ったのは大変貴重な経験だった。

ストラスブールの市街地はとても美しく、とりわけ運河の内側は歴史的建造物が多い。路地に一步入って重厚な門を開けると、美しい中庭と愛着が伝わる生活の場が広がっている。日本での研究漬けの環境に比べ、フランス人が短い時間の中で研究を行い、プライベートな時間も大切にしていることは新鮮であった。私もときどき自転車で友人の家に向い、緑溢れる中庭で、まるで秘密の花園に入り込んだような不思議な感覚とともに、研究や将来の夢を語りあった。その中には、「化学と芸術」など日本ではあまり話さないような話題や、「結婚や子育て」、「歴史」など多くの文化的な要素が含まれ、多彩な価値観を共有した。このような経験は、その後の研究活動や「仕事と家庭の両立」という根本的な課題に光明を与えている。また、2011年にソバージュ先生が来日された際には、独立してから書いた論文を「フランスで読んだよ」と声をかけていただき、先生のお心遣いとこの化学の世界の繋がりに感謝した。

ノーベル生理学・医学賞受賞者の大隅良典先生は「本当に役に立つことは10年後、あるいは100年後かもしれない。社会が将来を見据えて、科学を一つの文化として認めてくれるような社会を願う」とおっしゃった。今回のノーベル化学賞も、まさに遠い将来を見据えた化学者たちのロマンが根底にある。ストラスブールで得たもの、それは、化学は芸術であり、科学を文化と捉える人たちとの時間であった。

[連絡先]

337-8570 埼玉県さいたま市見沼区深作 307 (勤務先)